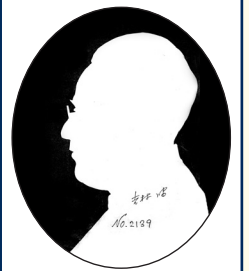


# 吉村昭記念文学館 ニュース 万年筆の旅



vol.14

令和2年3月22日発行  
登録番号(01)0093号  
編集・発行／荒川区  
問合せ／  
荒川区地域文化スポーツ部  
ゆいの森課  
吉村昭記念文学館  
〒116-0002  
東京都荒川区荒川112-50-1  
TEL.03-3891-4349

題字／津村節子氏  
切絵／山崎達郎氏  
【開館時間】  
9時30分～20時30分  
【休館日】  
毎月第三木曜日・特別整理  
期間・保守点検日・年末年始他  
【入館料】  
無料

## 開催報告

### おしどり文学館協定 締結二周年記念講演会

「吉村・津村文学の魅力」  
日時：令和元年11月24日(日) 14時～16時  
場所：ゆいの森あらかわゆいの森ホール



講演を行う出久根氏

おしどり文学館協定締結二周年記念事業として、小説家の出久根達郎氏をお招きし、「吉村・津村文学の魅力」についてお話しいただきました。

出久根氏は、平成5年(1993年)に『佃島ふたり書房』(平成4年 講談社)で第108回直木賞を受賞し、平成28年より日本文藝家協会理事長を務められています。

昨年は、ふくい風花随筆文学賞特別審査委員長に就任するなど、各方面で活躍されています。

吉村昭、津村節子両氏とは、日本文藝家協会の仕事を通して親交がありました。新聞連載に関して手紙を出した時に、吉村から返ってきた葉書を、今でも大切に保管しているというエピソードを披露されました。

出久根氏は、最も好きな吉村作品として『ふぉん・しいほるとの娘』(上・下 昭和53年 毎日新聞社)を挙げ、この作品には吉村の特徴が全て含まれていると分析されています。また、シーボルトの娘であるイネを主人公に描いているが、実際は江戸時代そのものを描くことを意図したように感じると指摘されました。

さらに、通常書き手の思い入れが強くなり、血をたぎらせて執筆するような場面で、吉村は敢えて淡々と書いていると考察されました。冷静な表現は、読み手の想像力を掻き立て、興奮させていくとして、吉村作品のファンは、想像力の豊かな人が多いのではないかと述べられました。また、事実とともに小説に込められた吉村の作為を、どこまでが嘘で、どこまでが本当なのかという境目がわからない、事実めかした巧みな嘘として絶賛しました。

その例として挙げられたのは、イネが暴行を受けた相手に言った「人でなし」とい

う言葉でした。この言葉は、人がしたとは思えないような人間の仕打ちに振り回されるイネを描いた、小説全体を表す言葉だと話されます。そして、何の感情も込めずに書くからこそ、読み手に強烈な印象を残すと指摘し、吉村はそれを狙って「人でなし」という言葉を、作品中に創作したのではないかとこの見解を示されました。

一方で、津村については、若い頃に少女小説を執筆していたことを紹介されました。代表作の一つである『智恵子飛ぶ』(平成9年 講談社)で描かれた、自転車に乗って得意気な智恵子の姿には、少女小説を書いていた津村の面影を感じるとお話しになりました。

また、津村の『海鳴』(昭和40年 講談社)を例に挙げて、吉村・津村作品の共通点は、同時代に生きる様々な人物の立場をすべて頭に入れた上で、特定の主人公を描きだすところにあると強調されました。

当日は、大勢のお客様にご参加いただきました。出久根氏のユーモアを交えたお話に、会場は終始和やかな空気に包まれました。お客様からは「研究者以上のファンの視点で様々な解きほぐしをしていただき、大変楽しく聞かせていただきました」「吉村氏と親交のあった出久根氏のお話が聞けて良かった」などのお声をいただきました。

## 【新作紹介】証言記録映像

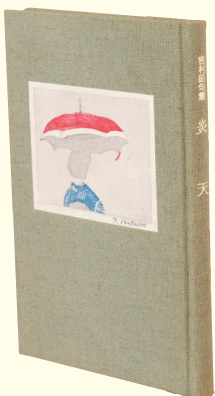
### 貫きしことに悔いなし

### 吉村昭と俳句

文学館では平成25年度から吉村氏の人物像や作家としての歩み等について、関係者の証言をもとに紹介する記録映像を制作しています。これまでに制作した10作品は常設展示室の映像コーナーで視聴できるほか、その総集編としてDVD「小説家吉村昭」を、一枚2千円で販売しています。

令和元年度は、俳人、尾崎放哉の晩年を描いた『海も暮れさる』(昭和55年 講談社)、吉村昭句集『炎天』と句会「石の会」(後に改組「狐火の会」)を中心に、関係者5名の証言から「吉村昭と俳句」について紹介する映像を制作しました。

今後、常設展示室2階の映像コーナーや文学館における事業での公開を予定しています。



吉村昭句集『炎天』

(昭和62年5月1日 私家版 津村節子氏蔵)

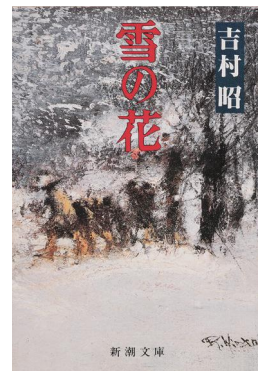
著作紹介  
第8回

# 『雪の花』

第7回トピック展示

吉村昭が描いた福井

「雪の花」―笠原良策と天然痘―  
の開催報告を兼ねて



『雪の花』

(昭和63年 新潮文庫)

かれは、崩れるように坐りこんでいる一行を起こすと、再び雪の中を進ませた。

ようやく栃ノ木峠にたどりついた。道はそこから深い谷間に入っている。両側は、仰ぎみるような断崖で雪塊が時折、落下してくる。雪は、崖の上から無気味にせり出していて、もしも突風が巻き起これば、雪がなだれ落ちて良策たちを圧死させるにちがいないかった。

良策は、神に身の安全を祈りながら一行をせかせて進み、幸いにもその難所を通り過ぎることができた。

峠を越えれば、福井藩の領内である。遂に良策は、種痘をおこなった幼児を福井領内にもちこむことができたのだ。

『雪の花』昭和63年 新潮文庫

福井県ふるさと文学館とおしどり文学館協定を締結してから2周年を迎えることを記念して、令和元年10月18日から12月18日まで、第7回トピック展示「吉村昭が描いた福井『雪の花』―笠原良策と天然痘―」を開催しました。今回の著作紹介では、展示の開催報告を兼ねて、福井の町医、笠原良策を主人公とした小説『雪の花』を紹介します。



トピック展の展示風景

の有効性を感じた良策は、弘化3年(1846年)、福井藩へ痘苗の輸入を嘆願しましたが、許可が得られませんでした。嘉永元年(1848年)に再度、嘆願書を提出し、福井藩医の半井元冲や、藩士で側用人の中根雪江らの協力を得て、ようやく輸入の認可を受けることができました。そして、雪が吹き荒れる中、京都から峠を越えて、痘苗を福井へ持ち帰ることに成功します。



笠原良策

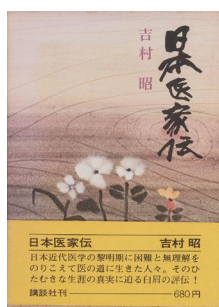
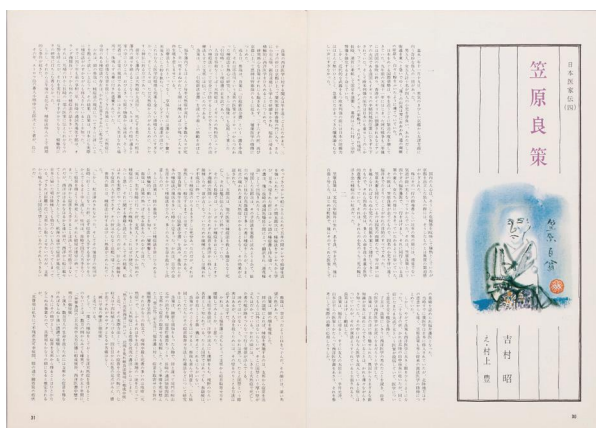
福井市立郷土歴史博物館蔵

笠原良策とは 笠原良策(白翁、文化6年〜明治13年)は、死の病として恐れられていた天然痘(疱瘡)から福井の人々を救うべく、種痘(天然痘予防用ワクチン「痘苗」)を接種することの普及に奔走した医家です。

良策は漢方医である父のもと、越前国足羽郡深見村(現福井市深見町)に生まれました。天保11年(1840年)、

京都の蘭方医日野鼎哉に入門し、「引痘新法全書」で種痘を学びます。種痘

掲載された「日本医家伝(四)笠原良策」です。この「日本医家伝」では、良策を始め、近代医学の礎を築いた12人の医家が描かれています。吉村は、これらの医家について、「時代の厳しい制約の中で、自己に忠実に生きようとした姿が、私には美しいもの」と感じられたとし、良策に対しては「種痘の普及につとめた精神力の強靱な人物」で「生き方にひかれた」とも述べています【註1】。また彼らに対して、現代の医家との類似性も見出していました【註2】。



『日本医家伝』  
(昭和46年 講談社)

「CREATA」第13号  
(昭和44年 日本メルク萬有株式会社)  
に掲載された「日本医家伝(四) 笠原良策」

「日本医家伝」の執筆の際には、医学史の専門家である小川鼎三氏と酒井シズ氏のもとに通い、資料を提供してもらいました。さらに、福井や長崎、青森、北海道などでも資料調査を行いました。

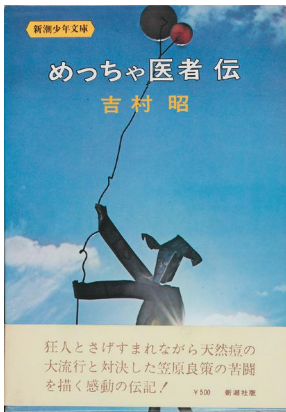
足掛け4年にわたった「日本医家伝」の連載を終え、吉村は「一人一人の医家の像が、私にからみついてはなれず、「この短編を基礎に長篇を書きたいと思った」といいます【註1】。その言葉通り、昭和46年11月、良策を主人公とした小説「めっちゃ医者伝」を発表しました。

**少年文学作品「めっちゃ医者伝」** 『めっちゃ医者伝』（昭和46年 新潮社）は、児童文学として刊行された「少年文庫」のひとつです。出版社の広告には「第一線作家が、伸びゆく世代にむけて書きおろした夢あふれる競作シリーズ」と書かれています。しかし、吉村は「おとなの文学への足がかりになるもの」と、こどものものであることを意識しないようにつとめ、自分のことばで書いた」と述べています【註3】。決して平易ではありませんが、文章を子ども向けにしなかったことは当時の書評でも好意的に捉えられていました【註4】。

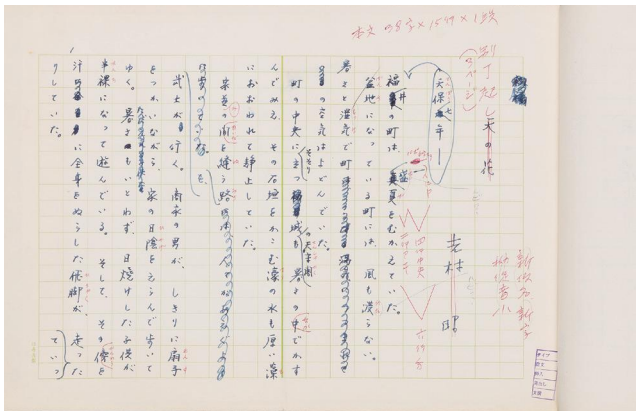
タイトルにある「めっちゃ」とは福井地方の方言で、天然痘に罹患した人の皮膚に残る「あばた」のことです。種痘の普及に対して周囲の理解が得られず、「めっちゃ医者」と蔑まれた良策が医師として困難に立ち向かう様を克

明に追いました。

この作品を書くにあたり、吉村は福井県立図書館職員で詩人の広部英一氏の協力を得ました。広部氏は、郷土の雑誌に連載していた「ふくいの本棚」という書評欄で、「めっちゃ医者伝」について「あらゆる困難をのりこえ、ひとすじの道をきわめ庶民の生活に灯をかざした郷土の偉人の伝記として、子どもたちにとくにすすめたい」と述べています【註5】。



『めっちゃ医者伝』  
(昭和46年 新潮社)



自筆原稿「めっちゃ医者伝」  
津村節子氏寄託資料

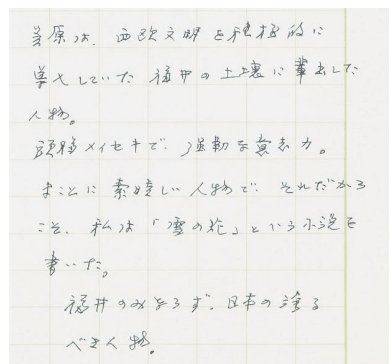
「雪の花」へ 「めっちゃ医者伝」以降、吉村は数多くの長篇歴史小説を手掛けます。とりわけ医学史を題材とした作品を執筆する過程で、良策という存在の重要性を改めて感じ、「腰を据えて書き直したい気持ちが強く」なり、再調査を始めることにしました【註6】。

吉村は、まず広部氏に連絡をとり、良策に関する古文書が福井市立郷土歴史博物館に寄贈されたことを知り、そこで、資料調査のため同館に赴きました。当時、対応にあたった角鹿尚計氏によると、良策の日記「戦兢録」や記録「白神用往来留」を黙々と筆写していたといいます。吉村は古文書を読み解き、「めっちゃ医者伝」での誤りを修正して、昭和63年に「雪の花」を発表しました。

**吉村が捉えた良策像** 吉村は、講演で使用したと思われる自筆メモで良策について次のように記しています。「笠原は、西欧文明を積極的に導入していた福井の土壌に輩出した人物。／頭脳メイケキで、強靱な意志力。／まことに素晴らしい人物で、それだからこそ、私は「雪の花」という小説を書いた。／福井のみならず、日本の誇るべき人物。良策の人間性に惹かれたからこそ、綿密に調査を続けて、「日本医家伝」から「めっちゃ医者伝」、そして「雪の花」と書き改めました。

吉村は、「雪の花」に限らず、確固たる意志を持ち、信念を貫こうと身を砕く人物を多く描いています。これらの人物と、作品を通して人間の本質を探

究し続けた吉村の姿が重なるように思えてなりません。



吉村の自筆メモ  
津村節子氏寄託資料  
笠原に関する記述がある。

**展示「吉村昭が描いた福井「雪の花」——笠原良策と天然痘——** 展示では吉村の自筆原稿やメモ、書籍等の展示と合わせて、福井県ふるさと文学館や福井市立郷土歴史博物館、歴史のみえるまちづくり協会といった関係機関から写真等を提供していただき、福井市内に残る良策に関する史跡も紹介しました。今後、福井県ふるさと文学館と協力して、ゆかりの文学を両地域内外に広く紹介するため、連携を進めていきます。

【註1】「文庫版あとがき」（『日本医家伝』昭和48年 講談社文庫）、【註2】「あとがき」（『日本医家伝』昭和46年 講談社）、【註3】「水曜レポート」（『サンケイ新聞』昭和47年1月12日夕刊）、【註4】「八杉龍一」（『こどもの本』（サンケイ新聞）昭和46年12月22日）、【註5】「現代作家の童話」（『図書新聞』昭和47年2月5日）、【註6】「フエニックス」vol.19、No.19（昭和47年1月 福井PRセンター）、【註7】「あとがき」（『雪の花』昭和63年 新潮文庫）

令和元年度企画展

「吉村昭」「海も暮れきる」

「俳人、尾崎放哉を見つめて」  
 関連イベント開催報告

朗読会「海も暮れきる」とトーク

出演：橋爪功氏（俳優）

日時：令和元年10月14日（月・祝）

場所：サンパール荒川

3階 小ホール



小豆島での撮影について語る橋爪氏

令和元年度企画展関連イベントに、俳優の橋爪功氏をお招きしました。吉村昭は、長篇小説『海も暮れきる』（昭和55年 講談社）で、俳人、尾崎放哉が最晩年の8か月を過ごした小豆島を舞台に、自らの闘病体験をふまえて、その生と死を描き出しました。橋爪氏は、この作品を原作とするドラマ『海も暮れきる〜小豆島の放哉〜』（昭和61年 NHK）で主演を務め、尾崎放哉を演じました。ドラマは、監督である橋高幸三氏の意向により、小豆島オールロケで制作され、橋爪氏以外の出演者は、全て小豆

島の住民の方々でした。

今回のイベントは、台風19号の影響が残る中で開催しましたが、この日を心持ちにされていたお客様で満席となりました。まず、第一部では、吉村と橋爪氏、病床の放哉を世話するシゲを演じた小豆島の住民、大村明美氏による鼎談を含むドラマ紹介映像を上映しました。その後、橋爪氏から、昭和57年（1982年）のラジオドラマ（NHK FM）に始まった小豆島でのオールロケや吉村との思い出、吉村作品の魅力について、お話しいただきました。さらに、第二部では、「海も暮れきる」の最終章を中心に朗読いただきました。橋爪氏の臨場感あふれる軽妙なトークと、圧倒的な表現による朗読には、共にドラマを創り上げた小豆島の方々や、吉村に対する親愛と、作品への深い思いが滲み、会場は終始、和やかに温かい雰囲気になりました。

ここでは、橋爪氏のトークを紹介します。

ラジオドラマの第一歩

こんにちは。若かったでしょう。僕も築屋で見ている、愕然としました。ほんとと若かった（笑）。今はもう気持ちちが小豆



（左）放哉を演じた橋爪氏

（右）シゲを演じた大村明美氏

写真提供 小豆島尾崎放哉記念館

島の方に飛んでいっちゃって。先ほどのドラマでシゲさん役の大村明美さんからも電話があって、本当は来たかったので、皆さんにぜひよろしくとお伝えくださいということでした。本当に台風は、大丈夫だったんですか。皆さん。今日はね、荒川のそばだろう、やめようかなと思ったの。2日3日たつてから水位が上がるといふこともあるじゃないですか。まだ自分の命のほうが大事ですから、皆さんより。だから本当に思ったんですけども、こんな悪天候の中というか、大変な時にたくさん集まっています。ありがとうございます。最初にございます。（最初に原作を読んだ感想は？）感想もなにも……。第一、放哉さんなんて予備知識も何もない！ですから、ひたすら吉村さんだのみな訳ですよ。本当に困りました（笑）。ところがね、小豆島に着いたら——なくなりました、不安や雑念が。うまく説明できないんだけど、放哉さんが突然自分の中に入り込んできたというか……。

最初にラジオから始まったんですね、この「海も暮れきる」というのは。橋高幸三というNHKのディレクターが突然電話をかけてきて「ラジオをやるんで、ついでにロケがあるので小豆島へ来てくれ」と言われて。ラジオでロケ！って。橋高とは、その前から友達だったんですけども。で、高松から高速艇で小豆島に渡ったんだけど、土庄港へ着いた途端に、橋高君がすっと寄って来まして「すぐこれに着替えて」と言うんです。凄く汚い浴衣と下駄一足渡されて、「何するの」と言ったら、「まあ、いいからついて来い」と言うんですよ。

ラジオは、石屋さんのシーンから始まりますが「橋爪さん、これ持って」と言って、



放哉が小豆島に到着したシーンで共演した

小豆島の皆さんと

2列目左から4人目が橋爪氏

写真提供 小豆島尾崎放哉記念館

ラジオが終わって「これ、テレビでやれたらいいね」って冗談のように言っていて、それから、1年ちよつと後にテレビドラマ化されるようになった。ラジオの時

芝居の本質—小豆島の皆さんと共演

当時、こんな大きいダンスケというんです。それが担がされて、自分で持って歩いて石屋まで。それで、石屋さんの方と、初めてそこで言葉を交わすわけですが、もうその時には、僕は放哉なんです。放哉にならざるを得ないというか。だって、変なものを着ていて、下駄履いて、痩せこけていて、何だか、よろよろして歩いているものだから。これはもう、尾崎放哉という現実の人の中に、僕はフィクションとして逃げ込むしかないと思った。それがラジオの第一歩です。恥ずかしいでしょう。だって、普通の人がいっぱいいるのに、汚い浴衣を着て、ダンスケを持って、下駄履いて歩いているって。それはもう、尾崎放哉という登場人物に逃げ込む以外、何にもできない。まあそれが結果的には、僕の中では良かったような気がします。



芸者を演じた高橋弘子氏と橋爪氏  
撮影の合間  
写真提供 小豆島尾崎放哉記念館



撮影中に放哉の墓参りをする橋爪氏  
写真提供 小豆島尾崎放哉記念館

も皆さん島の素人の方です。それで橋高に「今度は僕以外にどなたがお出になるの」と聞いたたら、「いや、この前と一緒だよ」と言われて。「えっ、この前と一緒だよ」と言小豆島の人」と聞いたたら「そうだよ」と言う。どうしてやろうかと思いましたが。その時本当に。後から考えたら、結果的にはそれが良くて。島の皆さんたちが、本当に素晴らしくて。

それで、順撮りで、夏から始まって、秋やって、最後春に、都合3回小豆島にお邪魔しました。何だろう、それは勿論、心底ではないでしょうが、もう島の人は僕が放哉だと思っご覧になってるわけです。だからシーン、シーンで、いろいろな方と芝居をやっていると、あまりリハーサルをやる怖いですね、素人の方というのは。ほとんど、良くなるんですよ。僕が良くなれば、それは倍良くなるから。橋高に「おい、もうリハーサルは、適当にしてくれ」って言うって。それぐらい凄かったです。

らうと、もう舌鋒鋭くなつて、人の気持ちを決めるようなことを、どんどん言うのです。その彼女相手にも僕が、何か悪態をつくというか、「これ何だよ」それは箸休めだ「箸休め、上等なことを言うじゃねえか」なんて言っつて、また絡むんですね……セリフですから(笑)。そのシーンが終わりました。僕が控室へ歩いて行くと、後ろの方からドタドタと足音が聞こえて振り返ったら、そのママが、合わない髪を引っ剥がしながら、帯を解きながら、突っ込んで来るんです。僕の方へ。それで、「あなた、今晚、うちの店へいらっしやい。何であなたに、あんなむちゃくちゃ言われなきゃいけないの。たっぷりお返しするから」って、もう青筋立てて怒っているのよ。「ああ、芝居の本質ってこれだな」と思っつて。恐ろしい経験をしました(笑)。そんなこともあつて、おかげさまで1年間、3回通つて作品ができた。本当にこれは今でも上映の機会があつたら、やつてもらいたいです。もし、機会があつたら、ご覧になっていただければ、こんな幸せなことはありません。

空気が自分をつくってくれる

放哉は、魅力というよりも、壮絶な人生を生きただけです。何とも言いようがないんですけども。ラジオの時じゃなかったかな、放哉を演じて小豆島へお邪魔して、急に偏頭痛が酷くなって、肩がパンパンに凝り出したんですよ。立っ

るのもやつとみたいな頭痛に悩まされた。橋高に「おい、こうなっているんだけど、俺、まだ墓参りに行っていいんだけど」と言つたら、橋高が「えっ、行ってないの」と。「だつて、連れて行ってくれなかったじゃないか」って、慌ててお墓参りをして。お酒をあげて、煙草はお吸いにならないから、煙草もあげて。帰ってきたら、次の日にスーツと楽になったのです。僕は、放哉のお墓の前で手を合わせながら「あなたのことを今からやるんだから、間違えても俺の邪魔をするな」と怒つたんですよ。これが効きましたね。もうびたつと(笑)。

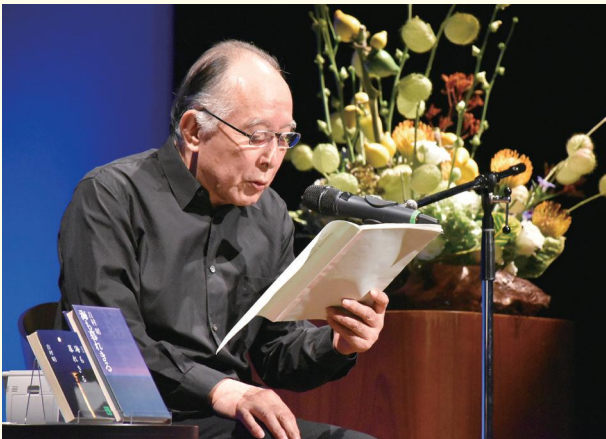
それからこんなこともありました。道端で醤油屋のおばあちゃんが、私を放哉だと間違えて「あんたさあ、本当に酒癖悪かったよ」なんて、引っぱたくんです。もう素晴らしい経験でした。だから芝居って、映画もテレビもそうなんですけれども、自分でも余計なことをしようと思うとだめなんですね。何か、そういう空気が自分のことをつ

くってくれる。その辺のことを、吉村さんは分かってくださったというか、良かったよと、おっしゃってくださいました。

放哉の妻、馨の佇まいと息遣い

放哉の妻で、馨さんという人物が出てくるんですが、テレビの時も、最後に後ろ姿が出るだけで、画面上ではあまり登場しませんでした。僕は、馨さんが、どうも気になっていました。小説「海も暮れける」の中に何回か、放哉の想念に馨のイメージや匂い、佇まいが出てくる。それで、今回朗読する時に、皆さんの前で馨の存在を、ちよつとやってみたくらいな思っつていたので。恐らく吉村さんは、そんなことを言つと、作家のことを勝手に想像しては、もういらっしやらないので悪いんですが、馨に対する吉村さんの思いというか、感じというのが、何となく気になつていたので、どうしても朗読したかった。

それと、吉村さんの作品で、もう一本やりたい作品がありまして。『仮釈放』(昭和63年新潮社)という作品。奥さんが浮気している現場に、他の人からの投書で帰つてきたら、案の定、奥さんが不倫なさつていてなさつていてじゃないよね(笑)。それで男の肩を包丁で刺して、その後奥さんを見たら、今まで見たこともないような無関心な冷たい目をしていたので、かあつとなつて奥さんを刺殺して刑務所に入っちゃう。それで後で刑務所から出てきてという「仮釈放」。また長くなりますから、もし機会があつたら、読んでみてください。その時の女性に対する感覚の匂いみたいなものが、僕は本当にたまらなくて。だから、馨という人の佇まいというか、息遣いを、今回どうして



『海も暮れける』(新装版 平成23年 講談社文庫)を朗読する橋爪氏

くっくれる。その辺のことを、吉村さんは分かってくださったというか、良かったよと、おっしゃってくださいました。

もやってみたいなと思って。放哉の臨終の場面も少しやりますが、最終章は、ちょっと長いですが、そこを選ばせていただきました。

### 吉村作品の魅力と吉村との思い出

人間の捉え方が半端ではないという。どういふ風にも、想像力で補えるというか。だから断定なさらないですよ、吉村さんは。周りの景色とか何もかも含めて、匂いをお書きになるのが本当に長けている方で、つつい、その登場人物の一人ひとりに引きずり込まれてしまうというか。

大体僕は、いつも家内に笑われるのですが、フィクションの中に逃げ込むのが大好きで。だから、いまだに役者をやっている、普通の社会人としては、非常にダメな人間だと思います。だから、フィクションに入り込める、入り込めないというのは、やっぱり映画であれ、もちろん小説であれ、僕にとっては、何かあるんですね。それが吉村作品の中には、たくさんある。そんな気がしています。「仮釈放」は、機会があったら読んでください。それだけではなく、吉村作品は、読んでいくうちに2、3ページ過ぎてくると、どんどん引き込まれるという、そんな稀有な作家だと思います。

吉村さんのご自宅へ、何回か伺ったり、一緒にお酒を飲んだりしました。傍へ行くとか、言葉の端々まで聞き惚れてしまうというか、聞いていたいなという、優しいだけではなくて、本当に取り込まれてしまうような方でした。

ドラマの中で放哉が酔っぱらって、毒舌になる場面は、本当に酷いんですね。私の師匠が、芥川比呂志という。この方は、私の演劇の究極の師匠です。古今東西の芝居

は、勿論よくご存知で、普段は本当に紳士なんです。ところが、酒を飲むと酷い。もう何度地獄を見たか。私は、孫弟子です。弟子筋の人、仲谷昇さんや、小池朝雄さん、その人達は、みんな知っているものだから、傍へ寄らないんです。僕は、孫弟子だから「お前、行け」と言われるのです。酒も、

適当に飲めましたから。後年は、芥川さんがどこかへ行くというと、ずっと傍についていたのです。それで、その時の酒乱ぶりを放哉をやった時に、しめしめと思って拝借しました。ちよつと誇張しましたが、でも、本当に凄かったの。人間、どこで苦労が実るか分からないって思いました(笑)。

それで、吉村さんは、「あなたの酒乱は凄かったね」と褒めてくださって。実はこうで話したら「なるほどな」とおっしゃって。「僕もお酒は好きだけどね。あそこまで酒乱になれる人は、羨ましいな」とおっしゃって。もう顔から火が出るようでした。私は、本当に温かい方なんです。一度あの世まで行きかけた方、行きかけた方って、変な言い方ですけども、それでもって、いろいろな登場人物、人間を深く、幅広く追究なさった方は、こうも優しいのかなと思うくらいに。僕が、吉村さんに、芥川さんの話をした時、「ああ、そうか。そのころに僕と会っていたら、君ももう少し、まじな人間になっていたかもしれない」とおっしゃった。それは冗談ですけども、本当にそう思います。もう何度も飲みたかったですよ、一緒に。それが、今、本心に心残りですね。今、生きていらっしゃたら、こんな所で、こんなことをしているのを、何とおっしゃるのか。ぜひ聞いてみたいと思います。本当に、ありがたい人に会えました。(了)

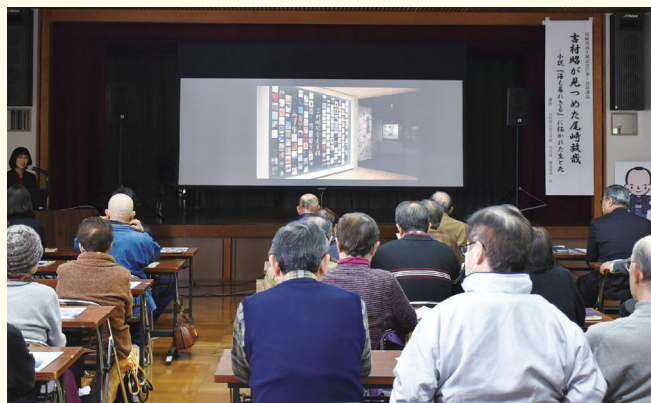
### 令和元年度企画展

#### 「吉村昭」「海も暮れきる」

― 俳人、尾崎放哉を見つめて ―

#### 開催報告

会期：令和元年10月13日(日)～12月18日(水)  
場所：3階 企画展示室

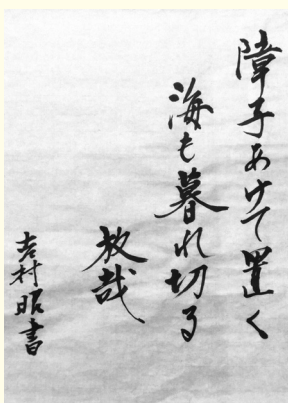


【写真1】「尾崎放哉生誕記念事業 放哉講話」で企画展資料を紹介

今回の企画展では、長篇小説「海も暮れきる」を取り上げました。収蔵資料を中心にたどり、吉村が自らの闘病体験をふまえてどのように俳人、尾崎放哉の心理を掘り下げ、「死とはなにか生とはなにか」という問いを追究したのかを紹介しました。また、吉村が、津村節子氏や親しい編集者、画家と28年間続けた句会「石の会(のち「狐火の会)」に関する資料を展示しました。展示をご覧になった方々からは、「吉村氏が自ら重ねた放哉の生き方に、もつとふれてみたい」と思った「吉村氏の俳句には、小説

家とは別の素顔を感じた」などの感想をいただきました。

令和2年1月18日(土)には、「尾崎放哉生誕記念事業 放哉講話」(主催 小豆島尾崎放哉記念館 会場 土庄町立中央公民館)で、「吉村昭が見つめた尾崎放哉―小説「海も暮れきる」に描かれた生と死―」と題し、企画展の内容を紹介しました【写真1】。この講話会は、毎年、放哉の生誕日(明治18年1月20日)を記念し、安住の地となった土庄町で行われています。当日は、大村明美氏をはじめ、ドラマ「海も暮れきる」小豆島の放哉」に出演した方々など、多くの方に参加いただきました。小豆島の方々が、撮影の日々と吉村との思い出を大切にされた作品に深い愛情を抱いていることを感じました。「放哉」南郷庵友の会幹事の森克允氏には、平成6年(1994年)、小豆島尾崎放哉記念館に建立された句碑「障子あけて置く海も暮れ切る放哉」の揮毫を、吉村に依頼した経緯をうかがいました。吉村は「暮れ切る」の表記を入念に確認し、句碑除幕式では、その大きさに驚きながらも、とても喜んでいただけそうです。また、小豆島尾崎放哉記念館が所蔵する「海も暮れきる」関連資料の調査を行いました【写真2】。この調査内容は、今後の展示などで紹介予定です。



【写真2】句碑のための揮毫 小豆島尾崎放哉記念館蔵

〈学芸員 深見美希〉

トピック展示開催報告

第6回 トピック展示

動物へのまなざし

会期：令和元年8月16日(金)

～10月16日(水)

第6回トピック展示では、吉村作品の一群をなす動物小説に焦点を当て、主要な作品を紹介するとともに、吉村が動物に強い関心を寄せた背景に迫りました。本紙では、その一部を紹介します。

1、動物への関心

昭和初期の東京下町で生まれ育った吉村は、子どもの頃からさまざまな動物を目にし、手に触れてきました。自宅の庭には、蟷蛙や蜥蜴、青大将や鼯がいて、至る所で鼠が走り回っていたといいます。蛍を捕まえて蚊帳の中に放ち、その明滅を見ながら眠るのを好んだり、廿日鼠が籠の中で回し車を踏み続ける姿を飽きずに眺めていました。時には、「残酷な遊び」に熱中し【註1】、ヤンマに赤蜻蛉や麦藁蜻蛉を餌として食べさせたり、蜻蛉の羽を切って飛ばせたこともあったといえます。

動物を身近に感じながら育った吉村は、「人間も動物の一種であり、他の動物との同居によって生きている」という考えを抱くようになりました【註1】。

人間は動物たちを包み込んでいる。という下町も同居の上に住んでいる。  
それ故、動物の存在が当たり前で当たり前

昭和53年4月7日、新潮社主催の講演会で「動物と私」について講演した際の手元用メモ。津村節子氏寄託資料

2、最初の動物小説

最初に書いた動物小説は、学習院大学文芸部時代に「赤絵」10号（昭和27年10月）に発表した「金魚」という作品です。吉村が肺結核で病臥していた頃の亲身体験に基づき執筆されています。

病勢が進み、死への恐怖から睡眠薬を飲んで死のうとするが、生き続けようと考えを改め、睡眠薬を枕元にあつた金魚鉢に入れる。金魚はたちまち腹部を横にして水面に浮かぶ、という話です。

その後、大小さまざまな動物を小説に登場させます。蝸牛、鼠、海馬、馬、牛、熊、目高、ハブ、鮪、錦鯉、鷺、鳩、十姉妹、鵪、鰻、蜜蜂、蜻蛉など種類も豊富です。動物（生き物）をタイトルにした作品も多く、「鷺」「ハタハタ」「野犬狩り」「軍鶏」「熊」「鵪」「蘭」「海」「鼠」「鳩」「蝸牛」「熊撃ち」「熊嵐」「蜜蜂乱舞」「螢」「鯨の絵巻」「螢の舞い」「鴨」「蜻蛉」「油」「海馬」「銀狐」「鶴」などがあります。また、タイトルには入っていませんが、動物を題材にした作品に、「魚影の群れ」「鮪」、「闇にひらめく」「鰻」、「研がれた角」「闘牛」、「光る鱗」(ハブ)、「緑藻の匂い」(牛蛙)、「紫色幻影」(錦鯉)、「おみくじ」(文鳥)、「銃

を置く」(熊)、「凍った眼」(錦鯉)があります。

吉村は動物に関心を寄せる理由について、動物の秩序正しい生き方に魅せられるからだと言っています。

季節の移行とともに生活を律している。その秩序正しい生き方の忠実な反復が、私には興味深い。【註1】

3、主な動物小説

ここでは、代表的な動物小説を刊行年順に紹介します。

① 短篇集 『熊』(昭和46年 新潮社)

昭和44年(1969年)から45年に発表した動物小説5作(「熊」「蘭」「軍鶏」「鳩」「ハタハタ」)を収録。最も早い時期に発表された「ハタハタ」は、漁で遭難した仲間の漁師を捜索するよりも、ハタハタを獲ることに没頭する漁師町の人々を描いた短篇小説です。

新聞記事に着想を得て執筆されており、記事を読んだ吉村は「人間の生じる苛酷な営みを感じた」と述べています【註2】。執筆にあたり、作品の舞台地である秋田県を訪れ、ハタハタ研究者や漁業関係者、遭難死した漁師の遺族らに取材をしました。

② 長篇 『熊嵐』(昭和52年 新潮社)

書下ろし。大正4年(1915年)に北海道苫前郡苫前町三溪で起きた三毛別熊事件を題材にした長篇小説。熊が民家を襲い、わずか2日間で7名が死亡、3名が重傷を負いました。

吉村は現地に何度も足を運んで事件の生存者や記録類を丹念に調べ、約3年の歳月をかけて書き上げました。作中では、

事件の全容とともに、取材を経て明らかになった開拓民の苛酷な生活や土地に対する執着心なども描かれています。

③ 短篇集 『魚影の群れ』(昭和58年 新潮文庫)

昭和48年に『海の鼠』として新潮社から刊行した単行本を『魚影の群れ』と改題して文庫本で刊行。表題作の他、「海の鼠」「蝸牛」「鷺」を収録。「魚影の群れ」は、青森県下北半島の大間町を舞台に、鮪の一本釣りを生業とする漁師の孤独な闘いを描いた短篇小説です。吉村は大間町を訪れ、鮪の漁獲方法などを取材しました。「海の鼠」は、昭和20年代に宇和島市沖の戸島、日振島で鼠が異常発生した事件を題材にした短篇小説で、過剰に繁殖した鼠の群れに人間社会が浸食されていく様を描いています。

④ 短篇集 『海馬』(平成元年 新潮社)

昭和53年から63年にかけて発表した動物小説7作を収録。「闇にひらめく」は宇和島市の鰻採り名人、「研がれた角」は宇和島市の闘牛飼育家、「螢の舞い」は福岡県筑後市の螢人工飼育家、「鴨」は新潟県の信濃川流域で鴨宿を経営する主人、「凍った眼」は養鯉業者、「海馬」は知床半島羅臼のトド撃ちに取材をして執筆した虚構小説です。「銃を置く」は北海道苫前町のフマ撃ち名人を主人公にした実話に基づく小説です。

展示で紹介した著作本は、文学館2階著作閲覧コーナーで常時ご覧いただけます。この機会にどうぞお立ち寄りください。

【註1】動物と私(『日い遠景』昭和54年 講談社) 【註2】後記(『吉村昭自選作品集』第11巻 平成3年 新潮社)

# トピック展示開催報告

第8回 トピック展示

## 吉村昭の取材力

会期：令和元年12月20日(金)

～令和2年2月19日(水)～

綿密な取材と丹念な資料調査で、実に基づく作品を数多く描いてきた吉村昭。昭和48年(1973年)には、「戦艦武蔵」や「関東大震災」など、一連のドキュメント作品で菊池寛賞を受賞しました。

今回のトピック展示では、吉村の取材に焦点を当て、その手法や内容について紹介しました。その一部を報告します。

### 1、取材のはじまり

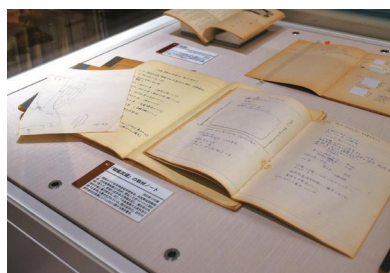
吉村は「戦艦武蔵」を発表するまで、実体験に基づく短篇小説や虚構小説を書いていました。取材はすでにこの頃から行われており、その始まりは、昭和33年に発表した「鉄橋」という作品でした。ボクサーを主人公にした短篇小説で、吉村は物語の背景となるボクシング界を調べるため、ボクシングジムに通いコーチやボクサーに内情や私生活、心理状態について聞き取りを行いました。

ボクサーの話聞いた吉村は「想像

### 2、証言を得る

吉村は「戦艦武蔵」で初めて史実に基づく小説を書きます。1週間かけて「武蔵」を建造した旧長崎造船所関係者や旧海軍技術関係者、旧武蔵乗組員らに取材し、その証言をもとに小説を組み立てていきました。

乗組員の手記も読みましたが、中には事実と反した記述もあり、「参考資料を机上にのみ上げる」ことよりも「外に出て歩く」ことに多くの精力を傾け

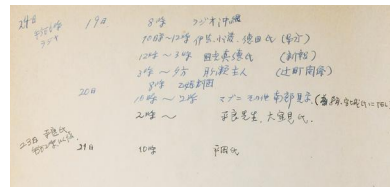


### 「戦艦武蔵」の取材ノート

取材開始2日目でノート2冊を使い果たす。ノートには、聞き取り内容が子細に書き留められており、「今後蒐集する資料及び調べる事項」なども書き出されている。津村節子氏寄託資料

### 「殉国」の取材ノート

沖縄に1か月間滞在し、関係者80余名に取材。ノートに記されたタイムスケジュールを見ると、朝8時から夕方まで隙間なく組まれている。昼食をとれなかった日や、夜の12時まで話を聞いていたこともあったという。津村節子氏寄託資料



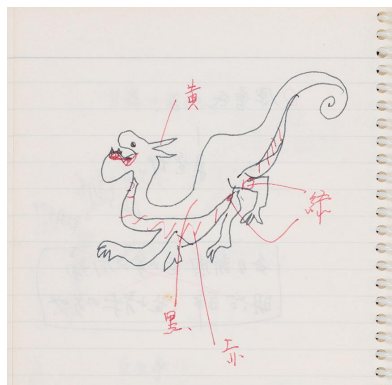
ていきました【註2】。

「記録は素気ないが、証言者の語る事は常に生々しく光彩を放っている」とする吉村は【註3】、丹念に証言を収集し、その積み重ねによって記録の背後にある真実を描き出していきました。

### 3、資料調査と現場踏査

吉村は「戦艦武蔵」から7年が経過した昭和48年頃から、戦争体験者の減少によって十分な証言を得られなくなったことを理由に、戦史小説の筆をおき、江戸・明治を背景とした歴史小説を書くようになりました。戦史小説から続く「史実をゆがめてはならぬ」という創作姿勢を崩さないまま【註4】、その手法は、証言を得ることから資料調査へと変わっていきました。

残存する資料を求めて全国各地の図書館や資料館を訪れ、その度に新たな発見を得て帰ってきました。細部へのこだわりは情景描写にも表れ、「長英逃亡」では「土ぼこりが茶色か黒か」【註5】、「桜田門外ノ変」では「松の植



### 「ニコライ遭難」の取材ノート

資料調査の過程で明らかになった龍の刺青のスケッチ。津村節子氏寄託資料

えられているあたりの風景がどうなのか【註6】を調べるため現地に足を運びました。

展示をご覧になったお客様からは、「どれ程の資料を探されて、ご苦労がどれ程あったのかと思うと、読み終えてしまうのが切なくなりませう」などの感想が寄せられました。



### 取材道具

取材で使用したカメラ、取材ノート、万年筆、名刺、テープレコーダーなど。